

セロ弾きのゴー  
シュ

宮沢賢治



ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲（しうきようきよく）の練習をしていました。

トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼（め）を皿（さら）のようにして楽譜（がくふ）を見つめながらもう一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額に汗あせを出しながらやつといまい云われたところを通りました。ほつと安心しながら、つづけて弾いていまして、楽長がまた手をぱつと拍うちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞき込んだりじぶんの楽器をはじめて見たりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪いのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生懸命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思つてしていると楽長がおどすような形をしてまたぱたと手を拍ちました。またかとゴーシュはどきつとしましたがありました。ことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさつきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思つて弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏ふんでどなり出しました。

「だめだ。まるでなつていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやつているばくらがあの金沓かなぐつかじ鍛冶

だの砂糖屋の丁稚てつちなんかの寄り集りに負けてしまつたらいつた  
いわれわれの面目めんもくはどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困  
るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒おこるも喜  
ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしても  
ぴたつと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた  
靴くつのひもを引きずつてみんなのあとをついてあるくようなんだ、  
困るよ、しつかりしてくれないとねえ。光輝こうきあるわが金星音楽  
団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへも  
まったく気の毒だからな。では今日は練習はここまで、休んで  
六時にはかつきりボックスへ入つてくれ給え。たま」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマツチを  
すつたりどこかへ出て行つたりしました。ゴーシュはその粗末そまつ  
な箱はこみたいなセロをかかえて壁かべの方へ向いて口をまげてぼろぼ

ろ泪をこぼしましたが、氣をとり直してじぶんだけたつたひとりいまやつたところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅くおそゴーシュは何か巨おおきな黒いものをしよつてじぶんの家へ帰つてきました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたつた一人ですんでいて午前キヤベジは小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝えだをきつたり甘藍キヤベジの虫をひろつたりしてひるすぎになるといつも出て行つていたのです。ゴーシュがうちへ入つてあかりをつけるときつきの黒い包みをあげました。それは何でもありません。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床ゆかの上にそつと置くと、いきなり柵たなからコップをとつてバケツの水をぐくぐくのみました。

それから頭を一つふつて椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまつ赤になり眼もまるで血走つてとても物凄い顔つきになりいまにも倒れるかと思うように見え  
ました。

そのとき誰かうしろの扉をとんとんと叩くものがありました。「ホーシュ君か。」ゴーシュはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押してはいつて来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

ゴーシュの畑からとつた半分熟したトマトをさも重そうに持つ

て来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬うんぱんはひどいやな。」

「何だと」ゴーシュがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持つてこいと云った。第一おれがきさまらのもつてきたものなど食うか。それからそのトマトだつておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしつて。いままでもトマトの茎くきをかじつたりけちらしたりしたのはおまえだろう。行つてしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩かたをまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらつて云いました。

「先生、そうお怒りになつちや、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしやくにさわつてこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いやご遠慮えんりよはありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシュはすっかりまっ赤になつてひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかになかに氣を変えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシュは何と思つたか扉とにかぎをかつて窓もみんなしめて

しまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室へやのなかへ半分ほどはいってきました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭ふいて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思つたかまずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎつしりつめました。それからまるで嵐あらしのような勢いきおいで「インドの虎狩とらがり」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチツと眼をしたかと思うとぱつと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけました。扉

はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがってしばらくくしゃみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシュはすっかり面白おもしろくなつてますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」  
「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがってはねあがつてまわったり壁にからだをくつつけたりしましたが壁についたあととはしばらく青くひかるのでした。しまいには猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴー

シュをまわりました。

ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマツチを一本とつて「どうだい。工合ぐあいをわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖とがった長い舌をベロリと出しました。

「ははあ、少し荒あれたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマツチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫おどろは愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口の扉とへ行って頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻もどつて

来てどんとぶつつかつてはよろよろまた戻つて来てまたぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとなりました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱かやのなかを走つて行くのを見てちよつとわらいました。それから、やつとせいせいしたというようにぐつつすりねむりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをついで帰つてきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰たれか屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰びきいろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシュが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシュは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうというだけじゃあないか。」

するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちののはたくさん啼くのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこうとこうなくのとは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかつてるなら何もおれの処へ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾<sup>ひ</sup>いてやるからすんだらさつさと帰るんだぞ。」

ゴーシュはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかつこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやつてごらん。」

「こうですよ。」かつこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かつこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響樂（こくごきやうがく）も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どうちがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かつこうかつこうかつこうかつこうかつこうかつこうとつづけてひきました。

するとかつこうはたいへんよろこんで途中（とちゆう）からかつこうかつこうかつこうかつこうとついで叫（さけ）びました。それももう一生けん命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシュはどうとう手が痛くなつて

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかつこうは残念そうに眼（め）をつりあげてまだしばらくしないで

いましたがやつと

「……かつこうかくうかつかつかつか」と云つてやめました。

ゴーシュがすつかりおこつてしまつて、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わつてるのではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか。」かつこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれつきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かつこうは「くつ」とひとつ

息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」といってまた一つおじぎをしました。

「いやになつちまうなあ。」ゴーシュはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかつこうはまたまるで本気になつて「かつこうかつこうかつこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするのです。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になつてしまふんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴたりとセロをやめまし

た。

するとかつこうはどしんと頭を叩たたかれたようにふらふらつとしてそれからまたさつきのように

「かつこうかつこうかつこうかつこうかつこうかつこうかつこう」と云いつてやめました。それから恨うらめしそうにゴーシュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでものどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いいました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見ろ。夜が ажけるんじゃないか。」ゴーシュは窓を指さしました。

東のそらがぼうつと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとです

から。」

かっこうはまた頭を下げました。

「だま黙れつ。いい気になつて。このばか鳥め。出て行かんとむしつ

て朝飯に食つてしまふぞ。」ゴーシュはどんと床をふみました。

するとかっこうはにわか**に**びつくりしたようにいきなり窓を  
めがけて飛び立ちました。そして硝子ガラスにはげしく頭をぶつつけ  
てばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立つて窓をあ  
けようとしましたが元来この窓はそんなにいつでもするする開  
く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにが  
たがたしているうちにまたかっこうがばつとぶつつかつて下へ  
落ちました。見ると嘴くちばしのつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待つていろつたら。」ゴーシュがやつと二

寸ばかり窓をあけたとき、かつこうは起きあがつて何が何でも  
こんどこそというようにじつと窓の向うの東のそらを見つめて、  
あらん限りの力をこめた風でぱつと飛びたちました。もちろん  
こんどは前よりひどく硝子につきあたつてかつこうは下へ落ち  
たまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから  
飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかつこ  
うは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつ  
きそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をぱつと  
けりました。ガラスは二三枚物すごい音して碎くだけ窓はわくのま  
ま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが  
矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこま  
でもまつすぐに飛んで行つてとうとう見えなくなつてしまいま  
した。ゴーシュはしばらく呆あきれたように外を見ていましたが、

そのまま倒れるように室のすみへころがつて睡つてしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでいきますと、また扉をこつこつ叩くものがあります。

今夜は何が来てもゆうべのかつこうのようにはじめからおどかして追い払ってやろうと思つてコップをもつたまま待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一疋の狸の子がはいつてきました。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いて、どんと足をふんで、

「こら、狸、おまえは狸汁たぬきじるということを知っているかつ。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座つたままどうもわからないというように首をまげて考えていました。しばらくたつて

「狸汁つてぼく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出ふそうとしましたが、まだ無理に恐こわい顔をして、「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくれたと煮にておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行つて習えと云つたよ。」と云いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云つたんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡ねいんだよ。」

狸の子は俄にわかに勢いきおいがついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓こだいこの係りこでねえ。セロへ合わせてもらつて来いと

云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜だよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとつてわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするのかと思つてちらちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもつてセロの駒こまの下のところを拍子ひょうしをとつてばんぽん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾い

ているうちにゴーシュはこれは面白いぞと思ひました。

おしまいまでひいてしまふと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやつと考えついたというように云いました。

「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」

ゴーシュははつとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたつてからでないと音が出ないような気がゆうべからしていたのでした。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシュはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさつきのようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよつてゴムテープでぱちんととめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行つてしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていました。町へ出て行くまで睡つて元氣をとり戻もどそうと急いでねどこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもつたままうとうとしていますとまた誰たれか扉とをこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないか

の位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたろうというようにきよろきよろしながらゴーシュの前に来て、青い栗くりの実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児こがあんばいがわるくて死にそうでございませうが先生お慈悲じひになおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむつとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらく

だまつていましたでしたがまた思い切つたように云いました。

「先生、それはうそでございませう、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行つたがね。ははん。」ゴーシュは呆れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児こはどうせ病気になるならもつと早くなればよかつた。さつきまであれ位ぐうぐうと鳴らしておいでになつたのに、病気になるといっしょにぴたつと音がとまつてもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシュはびつくりして叫さけびました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼めを片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここらのものは病気になるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療なおすのでございます。」

「すると療なおるのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持

ちですぐ療る方もあればうちへ帰つてから療る方もあります。」  
「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになつておまえたちの病気がなおるというのか。よし。わかつたよ。やつてやろう。」ゴーシュはちよつとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔あなから中へ入れてしまいました。

「わたしもいつしよについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おつかさんの野ねずみはきちがいのようになつてセロに飛びつきました。

「おまえさんもはいるかね。」セロ弾きはおつかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊かのような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫だいじょうぶさ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシュはおつかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをごうごうがあが弾きました。するとおつかさんのねずみはいかにも心配そうにその音の工合ぐあいをきいていました。がとうとうこらえ切れなくなつたふうで

「もう沢山たくさんです。どうか出してやつてください。」と云いました。「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシュはセロをまげて孔のところを手にあてて待っていました。間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシュは、だまつてそれをおろしてやりまし



すると野鼠はびつくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふく膨ふくらんでいておいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸棚とだなへなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びに难道参れましょう。」と云いました。「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちよつと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシュはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしつて野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになつて泣いたり笑ったり

おじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへどっかかり倒れてたおすぐぐうぐうねむってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏にある控室ひかえしつへみんなぱつと顔をほてらしてめいめい楽器をもつて、ぞろぞろホールの舞台ぶたいから引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手はくしゅの音がまだ嵐あらしのように鳴って居おります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにそのそのそみんなの間を歩きまわっていましたが、じつはどうして嬉うれしきでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマッチをすつたり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなつて何だかこわいような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。

「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやつてくださいますか。」

すると楽長がきつとなつて答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したつてこつちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶ちよつとあいさつしてください。」

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやつてくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシュは呆氣あつけにとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて

云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシュに持たせて扉とをあけるといきなり舞台へゴーシュを押し出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセロをもつてじつに困ってしまつて舞台へ出るとみんなはそら見ろというように一そうひどく手を叩たたきました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度インドの虎狩とらがりをひいてやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫ねこの来たときのようにまるで怒おこつた象のような勢いきおいで虎狩りを弾きました。ところが聴衆ちようしゆうはしいんとなつて一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切

ながつてぱちぱち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちよどその猫のようにすばやくセロをもつて楽屋へ遁げ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあつたあのような眼をじつとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさつきとあるいて行つて向うの長椅子ながいすへどつかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこつちへ向けてゴーシュを見ましたがやはりまじめでべつにわらつていようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが楽長は立つて云いました。

「ゴーシュ君、よかつたぞお。あんな曲だけでもここではみんなかなり本気になつて聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立つて来て「よかつたぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通ふつうの人なら死んでしまうからな。」楽長が向うで云つていました。

その晩遅おそくゴーシュは自分のうちへ帰つて来ました。

そしてまた水をがぶがぶ呑のみました。それから窓をあけていつかかつこの飛んで行つたと思つた遠くのそらをながめながら

「ああかつこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒つたんじゃないかつたんだ。」と云いました。

セロ弾きのゴーシュ

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年 6 月 15 日発行

1994（平成 6）年 6 月 5 日 13 刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980（昭和 55）年 1 月

入力：水口充、野口英司

校正：野口英司

1999 年 7 月 23 日公開

2008 年 10 月 25 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。